海外日本人コミュニティの変遷と脱ナショナリティのゆくえ

研究代表者：吉原　直樹（東北大学大学院文学研究科教授）

１．はじめに

本研究は、グローバル化の進展によって移動の質がどう変わっているのか、またそれとともに移民社会にどのような地殻変動が生じているのか、という課題設定おこない、具体的にはバリの日本人社会に照準して、ナショナリティのありようを通して課題に迫っていこうとするものである。こうした課題設定はいうまでもなく、これまでの移動研究、とりわけ国際移動研究のありかたを根底から問うことからはじまる。ちにみに、藤田結子は、「これまで、国際移動研究は、出身地と移住先の経済的格差を前提とするプッシュ―プル論や、親族の媒介を強調する社会的ネットワーク論を用い、発展途上国から先進国への労働力移動や『家族呼び寄せ』などを主に扱ってきた。」〔藤田 2008:14〕と述べ、続いて移民社会研究では「ナショナル・アイデンティティがどう変化するのか」が中心的な争点をなしてきた、と言明している〔同上：18〕。本研究は、こうした従来の研究動向、とりわけ移民社会研究の動向にたいする反省的視座に立って、とりわけバリ日本人会の「内」と「外」で放恣に立ちあらわれているさまざまなネットワークに視野を据えて上述の課題設定に少しでも迫ろうとするものである。

さてバリ日本人コミュニティを経験場とする際、「ライフスタイル移民」をキーワードとする山下晋司らの一連のモノグラフ（〔山下 2007〕等）が有力な参照系としてあるが、ごく最近、インドネシアをフィールドとして「異文化結婚」のありかたを多面的に問う、吉田正紀によるモノグラフ〔吉田 2010〕があらわれ、ここでの課題設定の「現在性」および「妥当性」を検討する上で好個の資料を提供するようになっている。ちなみに、吉田は「グローバル化の進展」のなかで「外国人との結婚を意味する国際結婚は多義的な意味をもつようになっている」〔吉田 2010:18〕と述べ、国際結婚の概念の拡大の必要性について論及している。本研究は、この問題意識を共有するものである。

２．さまざまなネットワーク

(1)「硬い組織」からの離床

バリの日本人社会をめぐっては、ある時点まではバリ日本人会が中核的な役割を果たしてきた。しかしバリへの来住者が増え、その来住動機が多様化するにつれ、日本人会が必ずしも人びとの意識や行動の中心に位置しなくなっている。実際、バリに在住する日本人の間ではさまざまなサークルとか団体が形成されており、そうしたものとともに多種多様なネットワークが出来ている。それらは、人びとのセーフティネットの構築に貢献しているが、日本人会を必ずしもコアとするものではない。もともとバリの日本人会は、メンバーが階層的に拡散し、組織的に脱統合的である点に最大の特徴がある。に

もかかわらず、近年、とりわけ2000年以降に流入してきた新来層（ニューカマー）からは、自分たちの生活上のニーズに照応しない「硬い組織」になっていると受け止められることが多くなっている。考えてみれば、そうした新来層自体、それ以前の来住層とは意識や行動において明確な違いをみせている。

2010年に前後3回にわたって実施したヒアリングの結果によると、現在、バリ在住日本人の間でみられる主だったサークル・団体の数は 14（サヌールに拠点を置くものが８つ、ウブドに拠点を置くものが６つ）である。これらのサークル・団体の組織的構成を概観すると以下のようになる。

〔ヨガの会〕サヌールの「ごはんや」という日本食レストラン（オーナーは日本人、妻はバリ人）に来ていた常連客を中心にして、個人のニーズに対応できる組織をということで 2007 年の１月頃に発足。日本人会とは関係なく発足したが、2009 年４月に、これとは別に日本人会の文化部をベースにして立ち上げたヨガの会に吸収された。そしてヨガの会はその後日本人会からも補習校からも離脱した。日本人会には批判的な立場をとっている。インドネシア語教室も開催。事務局はアリッツ・バンガロー（ホテル）。発足時のメンバーは 7 人であったが、現在は 14 人。代表はフジタ、そしてカシヤ、ヤマモト等が有力メンバーとして加わっている。会費なし（活動に参加する場合にその都度参加費 5 万ルピアを支払う）。

〔将棋の会〕2007 年 4 月、日本将棋連盟のバリ支部が結成されたのと同時に発足。日本人会の文化部に所属。ウブドで月 2 回（第１および第３）、サヌールで月２回（第２および第４）開催（お互いに行き来できるよう、相互に重ならないように工夫）。活動場所はアリッツ・バンガロー。メンバーは約 10 人。代表は設けていないが、カワダを中心にしてカシヤ、モリタ、サクナミ等が合流。メンバーは一番若い人で 30 歳代後半、一番年長者で 75 歳。活動の後に飲食をともにする（ただし、カワダは参加しない）。文化部で子どもの将棋大会をやろうという意見が出ているが、未だ実現していない。会費は年 30 万ルピア。なお、将棋の会とは別に、カワダの自宅で、週 3 回集まって将棋をさしている。

〔テニス・サークル（A)〕2000 年春に発足。これ以前に日本人会の文化部にテニス・サークルができていたが、これとは無関係。毎週１回木曜日の朝、DPL のコートで練習。コートの賃貸料は１ヶ月 5 万ルピア。会費は月額 5 万ルピア。メンバーは 12 人。カワダがリーダーシップをとっている。主たるメンバーは、カワダ以外、カシヤ、ヤシマ、エトウ、トモコ、ヤマモト等。練習の後、飲食をともにすることはない。ただ、メンバーの誰かが日本に一時帰国するといった時などは送別会をおこなってきた。サークルとしては、各種競技大会に積極的に参加し、メンバーのなかから優勝者もあらわれている。

〔テニス・サークル（B)〕2002 年 9 月頃に発足。メンバーは 9 人（常時練習に出て

くる人)。テニス・サークル（A）のメンバーとかなり重なっているが、女性がやや多い。ヤシマが取り仕切っている。「活動は技をきわめるよりもむしろ親睦の方に重点を置いている」（ヤシマ)。日曜日以外、誰かが PLN で練習をしている。会費は月額 2 万ルピア。メンバーの誕生会は必ずおこなう。また飲食会もよくおこなう。いずれも A バンガローで開催。

〔バリ美化運動〕2008 年 1 月に日本人会の文化部内のゴミ・ボランティアとして発足。ボランティアを立ち上げるきっかけは、「川がゴミでいっぱいになり、しばしば洪水を招いていること、またメンバーの多くが投げ釣りを趣味としているが、釣りのために川とか海にでるとゴミが体にまとわりついてくるようになることに危機をおぼえた」（カシヤ）ことによる。日本人会のイシドのよびかけではじまり、年長者ということでカシヤが代表になり、今日に至っている。メンバーは 20 人で、エトウ、ヤマモト、カワダ等、さらに領事、旅行会社も加わり、空間的にも社会的にも「間口の広い」活動となっている。会費なし。2010 年には、子どものときからの啓発活動が重要ということで、インドネシア語のバリ・エコカルタ（1 セット 40 枚）も作成した。

〔バリ釣りクラブ〕2005 年の 5 月頃に発足した釣り同好会。日本人会とは直接接点はないが、日本人会のメンバーも加わっている。メンバーは 20 人（そのうち 1 人だけ女性)。カシヤが代表をつとめ、エトウ、ヤマモト等が加わっている。旅行会社につとめている人が多くを占めている。会費は 6 ヶ月で 18 万ルピア。ジンバランから船を出し、活動範囲はウルワツまで拡がっている（カシヤは運転をしないために、もっぱらサヌール沖をフィールドにしている)。常時、釣りに参加するのは、5～6 人であるが、忘年会とか飲み会のときはほぼ全員が参加。1 年に 1 回総会を開催（80%位の参加率)。バリ美化運動の人的供給母体になっている。

〔被爆をバリに伝える会〕2009 年 3 月、H 市出身のヤマモト夫妻が立ち上げる。正式名称は Peace from HIROSHIMA（PFH)。原爆資料館の友人の協力を得て、被爆をバリに伝える。日本語高校教師会（MGMP：高校で日本語を教えている教師集団）の支援（ヨシダが媒介）を得て、バリの高校生に伝えることから開始。これを契機に、原爆資料館、H 市教育委員会を介して、バリの高校生を H 市の高校に招くことを検討中。活動は、バドゥン県知事夫人主宰の夫人の集いでの上映へと展開し、現在、アリッツ・バンガローでの月 1 回の映写会の開催を予定。活動は事実上、ヤマモト夫妻がおこなうも、国際交流基金のヨシダおよび「ヨガの会」のフジタの仲介、H 県人会のバックアップが鍵をなす。

〔H 県人会〕ヤマモト夫妻と国際交流基金のヨシダ（F 市出身）が話し合い、PFH と同時に立ち上げる。10 人で発足。現在のメンバーは 15 人（H 県出身以外でも県人会に興味を抱いている人なら入会可)、そのうち夫婦は 4 組。世話人はヤマモト（夫)。３ヶ月に 1 回、適当なレストランで開催。メンバー間の情報交換、話題提供者の話を

聞いた後で食事会。会費なし。会合に出席したときに実費を徴収。「ヨガの会」のフジタはオブザーバーで出席。PFH と表裏の関係をなす。
〔バリの森を考える会〕2006 年、モリタが立ち上げる。動機は「バリで森林が急速に減っていること、またバトゥール湖の水位が 2 メートル位下がっていることを知って、何とかこれをくい止められないかと考えた」（モリタ）ことによる。呼びかけ時には日本人会のネットワークを利用。その後、2000 年代前半から植林活動をおこなっている日本語高校教師会や日本の NPO（アジア植林友好協会）と協働すること（前者についてはヨシダが媒介）で活動が拡大、実際の植林時には 100 人強が参加。モリタを代表にして、サクナミ、イカワ、フジタ等が主力メンバーを構成。植林活動とともに、「植林祭」等を開催し広報活動を推進。会費なし。活動費用は寄付金と私費に依拠。
〔古本交換会〕2000 年に発足（1990 年代半ば頃からウブド在住の日本人会のメンバーの間で底流としてあったものをサクナミが立ち上げる）。1 年に 2 回ほど開催してきたが、2009 年にサクナミからフルカワ、マリコ、ゴトウに引き継がれてからは毎月 1 回土曜日に開催（2010 年 8 月末までに 17 回開催）。三ヶ所のレストラン（H、S、M）で交互に開催。フルカワの友人 7 人（専業主婦が中心）が実際の活動を担当。交換会のときは新しい本を持ってきた人が代わりに別の本を持って帰る。旅行者が新しい本を持ってきた場合には、飲み物を無料サービス。交換のルールはポイント制。毎回、20 人前後集まる。常連の人は名簿登録。
〔A 協賛店連合会 〕2002 年に発足。レストラン A が発行する A カードを提示すると協賛店で割引などの特典がうけられる制度として出発。発足時は 3 軒（そのうち 1 店はその後閉店）。2010 年 8 月末現在で協賛店は 70 店（バリ州全域に拡がる）。会費なし。文字通り、フルカワのアイデアではじまったもの。日本人が経営主であるレストラン間の情報交換にとどまらず、ここからさまざまなネットワークがアドホックに派生。レストラン K のユキ、レストラン U のタキコ等が積極的にサポート。
〔ウブド・エコ・プロジェクト〕バリの環境問題に照準して、イカワの着想で 2008 年にユキが立ち上げる。活動拠点はユキのレストラン K。ビニール袋、菓子袋の回収、リサイクル活動が中心。上述の A 協賛店連合会を通して活動を展開。会費なし。同時に、フルカワ作成のエコバックも有償頒布（50,000Rp）。ユキ、イカワ、フルカワが「活動の中心」をなす。「バリ美化運動」および「バリの森を考える」と連携、バリ全域への活動の展開も模索中。
〔ウブド子ども図書館プロジェクト〕「影武者」の立地するデサ（村）に子ども図書館を作ろうという動きがイカワの着想で数年前からみられたが、2010 年 6 月の子ども図書館のオープン（約 40 人参加）で事実上始動。図書館の運営が「活動の中心」。運営費調達のために、3 ヶ月に 1 回、チャリティバザーを開催。寄付金も募る。2010 年 10 月からは「語りの会」も開催（第 1 回目約 100 人参加）。ユキが担い手で、イ

カワ、フルカワ等が支える。上述の「ウブド・エコ・プロジェクト」と表裏の関係をなしており、共同でプログを立ち上げている。

〔ママの会〕2010 年 8 月発足。呼びかけ人はサトミ。会場はオーガニック・サロン「ソパ」。「ウブドで日本語で気さくに話し合える場をもち、ゆくゆくはウブドで補習校のようなものを作りたい」（サトミ）という趣旨で立ち上げる。子どもをもつ比較的若い日本人女性の居場所づくりを模索。第 1 回の集まりでの参加者は 23 人。サクナミがサポート。この「ママの会」を母体として、現在、若い母親を対象として月 1 回ワークショップ（Kecebongbali の会）、0~2 歳児を対象とした週 1 回の遊びの会（「豆の会」）を開催（前者は近くの図書館、後者は「ソパ」）。

(2)キーパーソンの生きてきた／生きる「かたち」

こうしてみると、「ヨガの会」から「H 県人会」まではサヌールを拠点とし、「バリの森を考える会」から「ママの会」まではウブドを拠点するものである。いずれも、2000 年以降に発足したのものばかりである。しかも多くは日本人会とは関係のないところから生まれている。このことは、日本人会が 2000 年前後あたりから日本人社会において急速に影響力を行使しえなくなったことを示している。さて注目されるのは、そうして生まれたサークル・団体が何人かのキーパーソンによって主導され、彼らの相互交流を通して、サヌールあるいはウブドを越えた重層的なネットワークを形成していることである。詳述はさておき、そこからバリの日本人社会にある程度の拡がりと厚みが加わっていることが読み取れる。以下、先のサークル・団体の概要から重複度の高いと思われる 10 人を選び出して、かれら／彼女たちの生きてきた／生きる「かたち」を順次概観してみよう。

フジタ：1937 年、東京生まれ。都内の有名私立大学工学部を卒業後、大手レコード会社に就職。1964 年からミュンヘンに 3 年間、ロンドンに 4 年間勤務。この間、1961 年に結婚。子ども 1 人。帰国後、まもなく勤務先が N 製作所に吸収合併される。それを機に退職し、米国の MTS に再就職。この間、技術職を通す。60 歳で定年退職。退職後、ほどなくしてピース・ボートの世界一周の船旅に参加（103 日間）。妻も同行。この船旅で視野が拡がり、外国居住を決意する。チェンマイ、プーケット、ペナン、クアラルンプール、バリ等を見て歩き、バリを居住先に選ぶ（2005 年 4 月）。最初、ビアウングの一戸建て住宅地に居住。ここで 1 年間居住した後、ジャラン・チカット・バリアンに移住。しかし車が多く、嫌気がさしていたときに、アリッツ・バンガローのオーナー（サエコ）に出会い、A バンガローに再移住（10 年契約）。そして現在に至る。セキュリティがしっかりしており、満足している、という。「ヨガの会」を主宰することを通して、他のサークル・団体との連携を深めている。

カシヤ：1935 年、兵庫県 K 市生まれ。北海道にある国立大学の工学部を卒業した後、

大手製造会社に就職。2000 年までその会社に勤務。この間、1965 年に結婚。子ども 3 人。1992 年にはじめてバリに来る（10 日間滞在）。1994 年に、長女がバリ人と結婚したのを機にバリを再び訪問。その後毎年バリに来る（毎回 1 ヶ月程度滞在）。そして退職後、バリに長期滞在（2 ヶ月滞在、その後シンガポールに 1 回出てまたバリに戻って 1 ヶ月滞在、という生活を繰り返す）。2004 年から 2007 年まではソーシャル・ビザで 6 ヶ月滞在を繰り返す。そして 2007 年以降はリタイヤメント・ビザを取得し、今日に至るまでバリに滞在。カシヤは魚釣りのサークル（「バリ釣りクラブ」）およびテニスの同好会で交友関係を広げるとともに、「バリ美化運動」の活動を積極的におしすすめ、それを多方面に展開するなかで、地域を越えたつながり／ネットワークを確保している。

ヤマモト：1940 年、H 市生まれ（被爆地 1 キロのところ）。都内の有名私立大学経済学部を卒業後、帰郷し、1985 年までガソリン・スタンドを経営。その後、材木輸入会社に勤務（3 年間）。さらにゴルフ練習場の支配人に転じる（7 年間）。その後、2 年間ぶらぶらした後に、マリーナを経営する会社の支配人になる（3 年間）。60 歳で定年退職。この間、25 歳のとき結婚（54 歳のとき死別）。子ども 3 人。63 歳のとき同じ町内出身のインドネシア国籍の日本人（1941 年生まれ、インドネシア人の元夫とは死別）と再婚。再婚と同時に、バリに来る（2004 年）。3 年前に現在住んでいるビラを購入（妻名義）。その間、しばらくはソーシャル・ビザで行ったり来たりするが、2008 年からはバリに定住。カシヤ、フジタとは日常的に行き来している。またヨシダとは「PFH」および「H 県人会」のことで頻繁に連絡を取り合っている。

ヨシダ：1979 年、F 市生まれ。中部地方の国立大学教育学部を卒業後、都内の国立女子大学大学院（日本語教育コース）に進学（この間、学部 3 年のとき、文科省の交換留学生として 10 ヶ月間アメリカに留学）。大学院 2 年のとき、都内の日本語専門学校で日本語教師をつとめる。大学院修了後、国際交流基金の派遣でバンコックのアサンプション大学で日本語教員として 4 年間教鞭を執る。その後一旦帰国後、2 ヶ月してバリへ（2008 年 6 月）。バリの高校の日本語教員の支援スタッフとして派遣される（2011 年 6 月までの契約）。現在、独身。ヤマモトの活動をバリの高校で展開するにあたってメディエーター役を果たす。モリタの活動の一部（お茶会の開催）にもお茶の先生（師範の資格有り）としてかかわる。さらに 2008 年から 2009 年にかけて補習校の図書ボランティアとしても活動（海外青年協力隊のシニアボランティアに誘われて）。

モリタ：1938 年、広島県 A 市生まれ。近畿地方の私立大学を卒業後、K 市にある地方新聞社に入社。1968 年に結婚。子ども 2 人。阪神淡路大震災のときメディア局にいて、そのときからインターネットに関心をもつようになった。その後、東京新聞の記者を通してサクナミと知り合うようになり、1993 年初めてバリに来る。1995 年、ウブドのコテッジを 5 家族（近所に住んでいる家族）と共同で建築。経営は現地人に

まかせ、スポンサーという形をとる。これ以降、退職（定年まで 2 年残して）をはさんで 10 年間は年 2~3 回のペースでバリに来る。2004 年にソーシャル・ビザを取得し、バリに定住。ソーシャル・ビザのため、半年に 1 回、外に出ることになっているが、これが新たな楽しみになっている。「バリの森を考える会」を主宰しながら、独自でホームページを立ち上げて活動の裾野を拡げるとともに、世界中に拡がっているアートマイルの運動にも関与。大村文庫の維持管理にもつとめる。

サクナミ：1938 年、東京生まれ。G 県の県立高校を卒業後、京都へ。帯の図案、彫金等の修行を積む。紙すきの技術も修得。70 年代、仲間とシベリア鉄道を経由してヨーロッパへ。そこでドイツ人と知り合い、彼の家でガムランを知り、バリに関心が向く。1978 年、バリの染色をみるために仲間と初めてバリに来る。このときデンパサール、サヌール、クタに宿泊した後、旅行会社勤務のサチコさんに誘われてウブドに行く。一泊 3 食 9 ドルのマンディのホテルに泊まったが、「ここがバリだ」と強く感じた。当時のウブドは通りに街灯がなく、電話も 3 台だけであった。82 年、レストランを建設（居所）。90 年、いま住んでいるヴィランタン・パリを建設。その後、大村しげが脳梗塞を患って静養するようになったのを機にコテッジを開始。80 年に子どもの絵交換展（京都―ウブド）を開催（その後現在まで毎年開催）、90 年にバリの紙すき展を銀座、京都、須磨で開催（このときモリタと知り合う）。これまで独身。ただしバリ人の養女あり。モリタと隣接して住み、バリ在住の日本人の活動に幅広く関与している。現在、日本人会の文化部長。

フルカワ：1968 年、北海道 S 市生まれ。S 市内の私立大学経済学部卒業後、S 市に本社のある会社に就職。2 年弱勤務。その後、独立をめざしてアルバイトへ。それから 2 年弱経ったところで、知り合いの年長の人にすすめられてはじめてバリに来る。３週間滞在。帰国してから半年後に再びバリへ。そのときは「リセットの心算で 1 年位」と考えていたが、その後今日までバリに在住。96 年から共同で店を開くが、翌年、独立してレストラン A を開店（その前に開店資金を獲得するために 3 ヶ月ほど帰国しアルバイトをする）。98 年、ペジェン出身の女性（32 歳）と結婚。子どもは二人（11 歳と 9 歳の女の子）。隣接して情報センターを開いているイカワとは 20 歳違いだが無二の親友。イカワとともに、ウブドのまとめ役として多方面で活動しているが、イカワが「影武者」であるのにたいして、むしろ表に出ることが多い。

イカワ：1947 年、愛知県 N 市生まれ。N 市内の私立大学商学部卒業後、インテリアデザインの会社に勤務。なお、大学在学中、1 年間休学して世界を放浪（50 ヵ国に及ぶ）。3 年間、デザイン会社に勤務した後、デザイナーとして独立。これ以降、さまざまなイベント事業に関与。25 歳のとき結婚（子ども 1 人（男））。離婚後、32 歳のとき再婚（子ども 1 人（男））。しかし再び離婚。ちなみに、30 歳のときライブハウスを立ち上げ、このときライブ出演していたユキと知り合う。86 年頃に卒業旅行をかねた大学生 2 人を引率して初めてバリに来る。5 泊 6 日の強行スケデュール（ウ

ブド素通り)。90 年に再びバリに来る。「来たときにはロンボックに住む心算であったが、ウブドに来てはまってしまった。」これ以降、帰国していない。レストラン K を立ち上げる他、ウブドにおけるさまざまな活動の仕かけ人として活躍。文字通り〝影武者〟的存在。

ユキ：1962 年、愛知県 H 市生まれ。地元の県立高校卒業後、N 市内で約 4 年間フリーターをやる。高 3 のときからバンドをやっていて、フリーターをやりながらプロを目ざすが挫折。22 歳のときイオンに就職。87 年、友人と一緒にはじめてバリに来る。バリに来る前から、バリのガムランの音曲に惹かれていた。翌年の 88 年、再びバリに来る。1 週間滞在。このとき長期滞在しているという日本人画家に出会い、長期滞在を決意。一旦帰国し、2 年間イオンで働き、貯金をして、90 年半ば、三度バリに来る。「とにかくバリが好き」ということで来たが、当初は半年位で帰る心算であった。しかしイカワと出会い、「日本人の心休まる場」を作ろうということでイカワとの共同出資でレストラン K を立ち上げる。96 年、バツ・ブラン出身のガムラン奏者と結婚（結婚と同時にインドネシア国籍を取得)。子どもは 2 人（長男 14 歳、長女 8 歳)。「影武者」を拠点に、フルカワ、イカワ等と連携しながら、さまざまな活動をおこなっているが、バリ社会と日本人社会の「架け橋」になることが目標、という。

サトミ：1973 年、大阪府 S 市生まれ。N 県にある私立大学外国語学部（英米学科）卒業後、O 市内の輸入家具店所有の喫茶店で 1 年ほど勤務。その後、バリに来て 3 週間ほど滞在。(バリには 19 歳のとき、姉たちに誘われてはじめてくる。そのときの印象は「だらけた、ゆるい社会」というものであった。その後、年 2 回位のペースでバリに来る。）帰国後、O 市内の内装デザイン会社に 1 年半ほど勤務。退職後、またバリに来たが（24 歳)、一旦帰国し、バリで住むための資金を獲得するために、1 年間フリーターかけもちで「メチャクチャ働いた」。そしてバリに再度来て、「シシ」(カバン店）を開いた。「とにかく行ってみたい」で始まったバリ行きであるが、いまや三つのカバン店、一つのオーガニック・サロンを経営するまでになった。ちなみに、2005 年に埼玉県 S 市出身の男性と結婚。子ども一人。バリ人と結婚している若手の日本人女性を糾合することに腐心しており、ウブドの日本人社会の新たな担い手と目されるようになっている。

(3)ネットワークと「ひきこもり年金族」

十人十色といえばそれまでだが、以上、一瞥したリーダーから共通に浮かびあがってくるのは、フットワークの軽さとバリ社会のなかで生きようとする意思の勁さである。もちろんサヌールを拠点とするか、ウブドを拠点とするかによって、また来住時期／在住期間によってバリエーションをともなっていることは否めない。とはいえ、やはり共通に日本人社会、そしてそこからつながっていくバリ人社会への開かれた関与が読み取れる。先に触れた多種多様なネットワークが地域を越えて自在に展開しているのも、こ

うした関与があってこそ可能となるのである。

同時に忘れてはならないのは、このような開かれた関与の影で、膨大な数の「ひきこもり年金族」が（日本人社会の）周縁に埋め込まれつつあることである。たとえば、ウブドにおいてサクナミと並んで最古参の一人であるタキコがいうには、「２、３人の趣味が一致するグループで集まる傾向がある。言葉も覚えないし、食事といえば日本食ばかり。もともとバリが好きで来たのではなく、バリに来るとぜいたくができるから来ているにすぎない。」という人が増えているという。日本人会の内部からは、そうした人びとは「日本人会に入っても、利益がないとわかるとすぐにやめてしまう」という声が聞こえてくるし、あるときなどは、補習校への寄付をもとめたところ、「何で日本人でもない間（あい）の子のために寄付をしなければならないのだ」と平然と言い放ったという。あらためて指摘したいのは、そうした「ひきこもり年金族」が「ライフスタイル移民」の裏面をなしていることに加えて、「世話にもならん。世話もせんという人」〔浜田 2010: 34〕であるという点である。詳述はさておき、バリの日本人社会では、みてきたようなサークル・団体をコアにして多種多様なネットワークが形成される一方で、そうしたものに見向きもしない年金族がネットワークのはざまでうごめいているといった奇妙な光景がみられるようになっている。

３．変容する情報環境と脱ナショナリティの動向

(1)顕著な紙媒体離れ

さて多種多様なネットワークの広がりは、当然のことながら情報環境の進展と密接に関連している。サークル・団体の活動にとって、どのようなコミュニケーション・ツールに依存するかは決定的に重要なことがらである。いうまでもなく、かつては紙媒体と固定電話が主流であった。しかし紙媒体についてはどのサークル・団体も用いていない。また生活の現場において携帯電話が普及するとともに、これまでの固定電話の利用シーンが極端にせばまってきている。かつて固定電話は紙媒体とセットとしてあった。両者は相互補完的に作用し合っていた。だから固定電話の衰退は紙媒体の衰退としてもあるのである。紙媒体／固定電話に代わって連絡網として躍り出てきているのが携帯メール（SMS）である。ちなみに、「ひきこもり年金族」のかなりの部分が、パソコンは言うにおよばず、携帯メールをまったく使えないのは意味深である。というのも、今日、周縁に布置している「ひきこもり年金族」の多くが、デジタル・デバイドの担い手となっているからである。

多層化する情報環境は、サークル・団体の間でまた違ったかたちのデバイドを生み出している。ひとつは、日本人会のメディア環境へのアクセス上の優劣にともなう格差である。とりわけ日本人会のメディア環境をめぐるサークル・団体間の利用格差が無視できないものになっている。多層化する情報環境の効用／メリットを享受することができるサークル・団体はますますフットワークが軽くなり、裾野を拡げることができるよう

になっているのである。しかしこのことは同時に、サークル・団体間の相互性をうながし、多元的な日本人社会の形成をうながす可能性も秘めている。いずれにせよ、多種多様なネットワークの叢生とともに、情報環境の変容が大々的にすすみ、日本人社会をきわめて動的なものにしていることはたしかである。

(2)進む「脱ナショナリティ」化

こうした動的な状況を示すものとしてあらためて注目されるのは、情報環境が多層化するとともに、日本人社会の間で、「モデル・マイノリティ」への志向ではない、「グローバル・ディアスポラ」の存在を想起させるような意識傾向／行動体系がみられるようになっていることである。紙幅の関係で、詳しくは、吉原ほか〔2010〕にゆだねざるを得ないが、母語メディアから離脱する傾向とか、情報源として CNN とか ABC あるいは BBC に依存する傾向が強まっていることは、明らかに「脱ナショナリティ」化の傾向を示すものであるといえる。またユキとかイカワの活動にみられるように、かつての「モデル・マイノリティ」の動きとは違った「脱ナショナリティ」化の動きも無視できない。

４．むすびにかえて

みてきたようなネットワークの担い手であるキーパーソンたちが「ライフスタイル移民」にねざすことは否定できない。同時に「ひきこもり年金族」をみていると、かれらの多くが日本の社会では満足にセーフティネットを構築することができないゆえに移動せざるを得なかったという、強制された移民の側面を有していることも事実である。「ライフスタイル移民」とこの不本意移民が「ともにある」ことが、いまやバリの日本人社会の大きな特徴となっている。さてこうした日本人社会においてナショナリティのありかたを問うことは、冒頭でも触れたように国際移動研究、そして移民社会研究の要をなす大事な課題である。しかし、ここでは紙幅の関係でほとんど言及することができなかった。ただ、ひとこと触れておくなら、移動者が出身地と移動先とをたえず往還しながら多層的な社会関係のなかから創り出すものとしての、今日いわれるところのトランスナショナリズムに近いゆるやかなナショナリティが立ちあらわれていることである。反対に、「ひきこもり年金族」からは、移動先とはつながらない、出身地に還っていくしかない自閉するナショナル・アイデンティティが深く底在しているのを観て取ることができる。本研究の残された課題は、これらが複雑にからまりあいながら、バリ日本人社会にどのようなナショナリティを生み出すことになるかを明らかにすることである。

なお、本稿の作成にいたるまでのさまざまな段階で善意ある多くの人びとの支援をたまわった。ここではいちいちお名前をあげることは控えるが、これらの人びとの支援なしには本稿はあり得なかった、と思う。いうまでもなく、本稿は最終的には JFE21 世紀財団 2009 年度アジア歴史研究助成に負っている。末筆になったが、心よりお礼を申し上げる次第である。

引用参照文献

藤田結子　2008 『文化移民』新曜社.

浜田　普　2010 『心をたがやす』岩波書店（現代文庫）

小泉康一　2009　『グローバリゼーションと国際強制移動』勁草書房.

佐藤成基編著　2009　『ナショナリズムとトランスナショナリズム』法政大学出版局

Urry, J. 2000　*Sociology beyond Societies*, Routledge.（吉原直樹監訳〔2006〕『社会を越える社会学』法政大学出版局

Urry J. 2003　*Global Complexity*, Polity.

山下晋司 2007「ロングステイ、あるいは暮らすように旅すること」『アジア遊学』104,108-116.

吉田正紀　2010 『異文化結婚を生きる』新泉社.

吉原直樹　2008 『モビリティと場所』東京大学出版会.

Yoshihara, N. 2010　*Fluidity of Place*, Trans Pacific Press.

吉原直樹ほか 2010「パリにおける日本人社会と多重化する情報環境――予備的分析――」『東北大学文学研究科研究紀要』59 , 85-126.